ユゴー
レ・ミゼラブル
2

世界文学全集
44
河出書房

世界文学全集
44

ユゴー

レ・ミゼラブル
2

井上究一郎訳

河出書房

© 1973

カラー版　世界文学全集　第44巻

ユゴー　レ・ミゼラブル　2

昭和45年2月25日　初版発行
昭和48年1月20日　再版発行

訳　者　井上究一郎
装幀者　亀倉雄策
発行者　中島隆之
印刷者　澤村嘉一
印　刷　凸版印刷株式会社
発行所　株式会社　河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3の6
電話　東京（292）3711（大代表）・振替口座　東京　10802

0397—312344—0961

定価1200円

製　本・加藤製本株式会社
製　函・加藤製函印刷株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表　紙・日本クロス工業株式会社

目　次

レ・ミゼラブル

2

第三部　マリユス（つづき）……7

第四部　プリュメ通りの牧歌とサン・ドゥニ通りの叙事詩……73

第五部　ジャン・ヴァルジャン……313

詳細目次……508

解　説……515

主要人物

ジャン・ヴァルジャン　ファヴロールの枝切り職人。貧しさと飢えのために一切れのパンをぬすんでとらえられ、トゥーロンの徒刑場に送られる。脱獄を重ね、十九年間の刑期をおえて放免。その年、一八一五年が物語の発端。彼は甦生してモントルイユ・シュール・メールの市長マドレーヌ氏となるが、ふたたび闇の世界にはいる。のちルブラン氏とも言われ、ユルチーム・フォーシュルヴァンとも変名する。物語は彼の生涯をめぐって展開、その死によっておわる。本書の主人公。

シャルル・フランソワ・ビヤンヴニュ・ミリエル　ディーニュの司教。高徳のほまれ高く、徒刑囚ジャン・ヴァルジャンに大きな精神的影響をあたえる。

バチスチーヌ　ミリエル司教の妹。老嬢。

マグロワール　ミリエル司教とその妹に仕える老女中。

プチ・ジェルヴェ　煙突掃除などをして各地を放浪するサヴォワの少年。

ルイ十八世　正統王朝派の国王。フランス大革命で死刑となったルイ十六世の次弟。一八一四年ナポレオン失脚後王位にのぼる。一八一五年ナポレオンの百日天下ののち重祚。一八二四年没。弟シャルル十世がそのあとをつぐ（一八三〇年まで）。王政復古期の国王。

ファンチーヌ　モントルイユ・シュール・メール出身の孤児。パリの通勤お針女。男にすてられ、郷里で女工、ついで売笑婦となり、マドレーヌ氏の診療所で病死する薄幸の女。コゼットの母。

フェリックス・トロミエス　ファンチーヌを誘惑してすてさる不良なパリの大学生。

コゼット　ファンチーヌとトロミエスとのあいだに生まれた私生児。孤児となり、田舎にあずけられ、「ひばり」と呼ばれ、虐待される。ジャン・ヴァルジャンに救われ、パリに出ていわばその娘となる。ラノワール嬢とも呼ばれ、のちに幸福な結婚をする。

テナルディエ夫妻　モンフェルメイユの安宿屋の主人。夫婦とも冷酷で貪欲。男はワテルロー軍曹と称しているが、うしろ暗い過去をもつ。コゼットをあずかり虐待する。一家はのちパリに出て下層民となり、男はジョンドレットと称する悪党となる。

ジャヴェール　ジャン・ヴァルジャンを徹底的に追っかけてやまない厳潔で無慈悲な警視。

フォーシュルヴァン　モントルイユ・シュール・メールで車の下敷きとなり、マドレーヌ氏（ジャン・ヴァルジャン）に救い出される。のちパリで女子修道院の庭番となり、ジャン・ヴァルジャンを献身的にかばう。

シャンマチウ　誤ってジャン・ヴァルジャンと見なされ、処刑されようとする老人。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

レ・ミゼラブル　2

井上究一郎訳

巻頭口絵　ヴィクトール・ユゴー像（カルナヴァレ美術館蔵）

作者不明

本文カラーさし絵

野田弘志

© 1970 H. Noda

装　幀　亀倉雄策

サンプリス修道女　ラザリスト会修道女、マドレーヌ氏の診療所にはたらく慈善看護婦。病んだファンチーヌを献身的に看護し、その死をみとる童貞。マドレーヌ氏（ジャン・ヴァルジャン）をジャヴェールの手から逃れさせるために、生涯にはじめてであり最後であるうそを述べる。

ナポレオン・ボナパルト　ワテルローの会戦についての作者の回想に登場する。

イノサント女修院長　常時聖体礼拝のル・プチ・ピクピュス女子修道院長。

マリユス・ポンメルシー　ナポレオンによって男爵をさずけられた軍人を父とし、パリのブルジョワの娘を母として生まれた孤児。ナポレオンを崇拝し、大革命の思想に共鳴し、王党派の祖父のもとをとびだして、革命運動に身を投じる。作者の若い日の一分身。コゼットの恋人となり、パリケードからジャン・ヴァルジャンに救い出され、やがて祖父にゆるされて結婚する。

ジョルジュ・ポンメルシー　マリユスの父、勇猛果敢な陸軍大佐。ナポレオン皇帝に献身し、ワテルローの戦場でテナルディエに救い出される。王政復古後、家族とひきはなされて孤独のうちに死ぬ。

リュック・エスプリ・ジルノルマン　マリユスの祖父。女好きの社交人で通したブルジョワの老人。頑固な王党派。その長女は独身、次女はポンメルシーの妻となり、マリユスを生んで死ぬ。マリユスはこの老人とその長女の老嬢とにそだてられた。

エポニーヌ　テナルディエ夫妻の姉娘。ひそかにマリユスを愛し、マリユスの命を救うために、パリケードでその犠牲となって死ぬ。

ガヴロッシュ　テナルディエ夫妻の息子。家庭の愛うすく、パリの浮浪児の群れに投じる。一八三二年六月五日の暴動に加わり、反乱軍のパリケードで大活躍するが、弾にあたって死ぬ。

ルイ・フイリップ王　オルレアン王朝派の国王。一八三〇年の七月革命によってフランス国民の王となる（一八四八年の二月革命まで）。七月王政期の国王。

マブーフ　サン・シュルピス教会堂の教区財産管理委員で、植物研究家。マリユスに好意をよせている老人。のちにパリケードで死ぬ。

テオデュール　ジルノルマン氏の甥の子、長女のジルノルマン嬢にかわいがられる陸軍中尉。

アンジョルラス、コンブフェール、ブルーヴェール、クールフェラック、フイイ、バオレル、レーグル（ポシュエ）、ジョリー、グランテール　政治秘密結社「ＡＢＣの友」の会のメンバー。情熱的な共和主義革命家たち。アンジョルラスはその仲間の首領株。マリユスを仲間に入れ、一八三二年六月五日の反乱を起こし、シャンブルリー通りのバリケードに立てこもって国民軍に抵抗しながら全滅する。

第三部　マリユス（つづき）

第八編　心がけのわるい貧乏人

一　マリユスは帽子をかぶった娘をさがしながら、庇帽をかぶった男に出あう

夏はすぎた。ついで秋も。冬がきた。ルブラン氏も若い娘も、リュクサンブール公園に足をはこばなくなった。マリユスは、あのやさしく愛らしい顔をもう一度見たい、ということしか考えなかった。彼は絶えずさがしまわった。方々をたずね歩いた。しかしなんの手がかりもなかった。いまはもう熱狂的な夢想家のマリユスではなく、果断で熱烈で力強い男でもなかった。運命への不敵な挑戦者でもなく、未来の上に未来をきずきあげて行く頭脳でもなく、計画や設計や自負や思想や意志にみちた若い精神でもなかった。まるで野良犬だった。彼は暗い悲哀のなかに落ちこんだ。何もかもおしまいだった。仕事にもいや気がさし、散歩にもあきあきし、ひとりでぽつねんとしていることにも堪えきれなかった。ひろびろとした自然も、以前はあれほどさまざまの形や光や声や忠告や眺望や地平線にあふれていると目えたのに、いまでは彼の前にうつろにひろがっているだけだった。すべてが消えうせてしまったように感じた。

それでもやはり思索はつづけていた。なぜなら、それよりほかにすることがなかったから。しかしもはや思索によろこびを味わうことはなかった。思索が絶えず低い声でもちだす提案に彼はそっと答えるのだった、「いったいそれが何になる？」

彼は何度も自分を責めた。なぜぼくは彼女のあとをつけたりしたのか？　彼女の姿を見ているだけで、ぼくはあれほど幸福だったのに！　彼女はじっとぼくを見つめた、それだけでもすばらしいことではなかったか？　彼女はぼくを愛しているようだった、それでじゅうぶんではなかったか？　だのに、ぼくは何がほしくなったのか？　あれ以上のものは何もないのに。ぼくはばかだった。まちがっていた、などと。彼はその性質として、クールフェラックには何もうちあけなかったが、クールフェラックのほうでは、やはりその性質として、ほぼすべてのことを見ぬいていた。そしてはじめのうちは、マリユスが恋する男になったのにびっくりしながらも、それを祝福していた。そのうちに、マリユスがふさぎこんでいるのを見て、とうとう彼に言葉をかけた、

――「なあに、ちょっとどうかしてたんだよ、きみは。さあ、ショーミエール（当時モンパルナス大通りでひらかれていた公開舞踏会で、とくに学生たちに人気があった）にでもでかけよう！」

一度、九月の晴れわたった日ざしに心をひかれたマリユスは、クールフェラックとポシュエとグランテールとにさそわれるままに、ソーの舞踏会（パリ近郊のソーで毎週一回ひらかれていた野外舞踏会。バルザックの小説の題名にもなった）に出かけた。もしかすると、そこで彼女の姿を見かけるかもしれないと思ったのである。なんという夢物語だろう！　もちろん求めている女性は見つからなかった。――「消えた女はたいていここで見つかるものなんだがな」とグランテールはひとりごとのようにつぶやいた。マリユスは友人たちを舞踏会に残して、ひとりで歩いてかえった。からだがだるく、熱っぽく、夜の闇が目先にかすんで、暗澹としていた。歌をうたいながら歓楽場からひきあげる連中を満載して、つぎつぎと彼を追いこして行く陽気な辻馬車、そのひびきとほこりとに圧倒され、がっかりした心で、路傍のくるみの並木の強い香りをすいこんでは頭をひやしながら、彼は家にかえった。

生活はふたたび孤独の色を深めはじめ、あてどもなく、おしひしが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れた彼は、内心の苦悩にとらわれ、わなにかかった狼のように苦しみのなかを転々としながら、姿を消した彼女をそこかしことたずねまわって、恋のためにばかのようになってしまった。

一度彼は、ある男に出あって、ふしぎな印象を受けたことがあった。アンヴァリードの大通りに近い小さな通りですれちがったのだが、その男は労働者のようなりをして、長い庇のついた帽子をかぶっており、その下からまっ白い髪の毛がのぞいていた、マリユスはその白髪の美しさにはっとして、その男を見つめた。男はゆっくりした足どりで、何かつらい考えごとに心をうばわれているようすで歩いていた。奇妙なことに、マリユスにはそれがどうもルブラン氏であるような気がした。髪もおなじ、帽子の下から見えるところでは横顔もおなじ、歩きかたも、ルブラン氏よりは痛々しく感じられるだけで、まずそっくりだった。しかしそれならば、あの労働者のような服は？　あれはどういうことだろう？　ルブラン氏が変装しているのだとすると、それはどういう意味なのか？　マリユスは非常なおどろきをおぼえた。やっとわれにかえった彼は、ひとまずその男のあとをつけてみることにした。それが彼のさがし求めていた手がかりをつかむことにならないと、だれに言えよう？　とにかく、もう一度その男に近づいてよく見さだめ、なぞをとく必要があった。しかしそう思いついたときはすでにおそく、男の姿はあたりになかった。どこかそのへんのせまい横町にはいってしまったのだろう。マリユスにはさがしだせなかった。この出あいのことは、それから数日のあいだ彼の気がかりになったが、やがてその印象も消えさった。――「けっきょく」と彼は考えた、「他人のそら似にすぎなかったのかもしれない」

二　拾いもの

マリユスはまだゴルボー屋敷に住みつづけていた。彼はその家のだれにも注意をはらっていなかった。

もっとも、そのころ、そこの住人はといえば、彼と、彼がいつか部屋代をはらってやったことのある例のジョンドレット一家とだけであり、しかも彼は、ジョンドレットの父親にも母親にも娘たちにも、話しかけたことは一度もなかった。ほかの借家人たちは、それぞれ引っ越したり、死んだり、部屋代をはらわないので追いたてられたりしてしまった。

その冬のある日、午後になってちょっと日ざしがもれたが、そのあてにならぬわずかな日ざしは、その日がちょうど昔の聖燭節（ろうそくの祝別をともなう聖母お潔めの祝日）にあたる二月二日だったので、それからはじまる六週間の寒気のきびしさの前ぶれのようなものであった。マチュー・レンスベルグ（十七世紀初頭、リエージュの教会参事会員、『リエージュごよみ』の作者）はそういう太陽に詩想を得て、つぎのような二行の古典的詩句を残している、

日が射すか、日が照れば、
熊はかえる、洞穴に。

マリユスは彼の洞穴から出たところだった。日は暮れかけていた。夕食をとりに行く時間であった。いくらなんでも、食事だけはしなければならない。至上の恋をいだく人間にもああ！　なんという弱さ！　彼が戸口を出たとき、ちょうどブーゴンばあさんが、こんな記憶すべきひとりごとをつぶやきながら、そこを掃除していた、

――「いまどき何が安いというんだろう？　何もかも高いじゃないか。安いのはこの世の苦労ばかりさ。この世の苦労だけは、ただでも手にはいる！」

マリユスはサン・ジャーク通りへ出るために、大通りを都門のほうまでゆっくりのぼっていった。何か考えこみながら、頭をたれて歩いて行った。

ふいに彼は、夕靄のなかでだれかにひじで突きのけられたのを感じた。ふりむくと、ぼろをまとったふたりの若い娘だった。ひとりは背

の高いやせぎすの娘で、もうひとりはそれよりいくらか背が低い。ふたりとも息を切らしながら、何かにおびえているのか、逃げるように足早に通りすぎた。彼女たちは彼の前方からやってきたのだが、こちらを見ていなかったので、すれちがいざまに彼にぶつかったのである。マリユスが夕闇をすかして見ると、どちらも青い顔をして、髪をふりみだし、ひどくよごれた帽子をかぶり、みすぼらしいスカートをつけていて、足ははだしだった。走りながら何か話しあっている。背の高いのが声をひそめてこんなことを言っていた、

――「さつのやつらがきたのよ。わたしぼやぼやしていて、もう少しでひっかかるところだったわ」

背の低いのが答えて、

――「わたしも見たわ。だもんだから、わたし夢中でずらかっちゃった、ぱっ、ぱっ、ぱっと！」

マリユスはそうしたおだやかならぬ隠語を通して、そのふたりの娘はあぶなく憲兵か巡査につかまりそうになったので、ここまで逃げてきたのだと察した。

娘たちはマリユスの背後の街路樹のかげにしのびこんだ。その姿はしばらく暗闇のなかにほの白くうかんでいたが、やがて見えなくなった。

マリユスはちょっと足をとめて見送っていたが、やがてまた歩きだそうとしたとき、足もとに何かしら灰色がかった小さいつつみが落ちているのに気づいた。彼はかがみこんでひろいあげた。それは封筒のようなもので、なかに紙がはいっているらしかった。

――「そうだ」と彼は言った。「あの気の毒な娘たちがおとして行ったんだ！」

彼はあともどりして娘たちを呼んでみたが、もう見つからなかった。それで、もう遠くへ行ってしまったのだと考えて、そのつつみをポケットに入れ、食事に行った。

その途中、ムーフタール通りへ出る小路で、彼は子供の葬式を見た。棺は黒布でおおわれ、三脚の椅子の上に安置されて、一本のろうそくの光に照らされていた。さっき夕闇のなかで出あったふたりの娘のことが頭にうかんだ。

――「気の毒な母親たち！」と彼は考えた、「わが子が死ぬのを見るよりも、もっと悲しいことが一つある。それはわが子がよくない生き方をしているのを見ることだ」

だが、ふだんとはちがった悲哀をかきたてたそうした暗い影も、やがて心から消えさり、彼はまたいつもの想念にふけった。心にうかんでくるのは、リュクサンブール公園の美しい木立ちのもと、大気と日光とにひたりながら、愛と幸福とを味わったあの六か月の思い出だった。

――「ぼくの生活はなんて陰気になってしまったんだ！」と彼は思った、「若い娘たちはやはりぼくの前にあらわれてくる。ただ、以前はみんな天使のようだったのに、いまではどれもこれも死肉を食う魔女に見える」

三　「四つの顔をもった怪物」（ラテン語、ローマ神話のヤヌスの神）

その晩、さて寝ようというときになって、服をぬぎかけていたマリユスは、ふと上着のポケットに手を入れて、大通りでひろった例のつつみに気がついた。すっかりわすれていたのだ。つつみをあけてみるのもむだではあるまいと考えた。もし実際あの娘たちがおとしたものなら、なかにその住所が書いてあるかもしれないし、そうでなくても、おとし主にかえすのに必要な手がかりが何か見つかるだろう。

彼は封筒をひらいた。封筒には封がしてなくて、なかに四通の手紙がはいっていたが、それにもやはり封がしてなかった。手紙にはそれぞれあて名が書いてあった。四通とも不快なタバコのにおいを放っていた。

第一の手紙のあて名は、――「衆議院前広場、……番地、グリュシ

ュレー侯爵夫人さまへ」

マリユスは考えた、文面にはたぶん何か手がかりになることが出ているだろうし、それに手紙には封がしてないのだから、読んでもべつに不都合ではないだろう。

文面はつぎのとおりであった。

侯爵夫人さまへ、

仁慈、敬愛の徳は、社会を一段とかたく結びつける徳であります。忠誠のために、また正統王位継承の神聖な大義を愛するために、身を犠牲にし、その大義を守護するために、みずからの血を流し、財産をも、しっけい（悉皆の意）ささげつくし、いまはこの上ないみしめな（みじめなの意）貧苦におちいっておりますこの不幸なスペイン人の身に、なにとぞあなたさまのキリスト教徒としての感情をおよせくだされ、あわれみのまなざしをおそそぎくだされますように。教育と名誉とをそなえながら、全身に傷を受けたこの軍人が、困難のきわめ（きわみの意）のなかにあってその生活をつづけられますよう、あなたさまの尊い御身分は、かならずや援助をお与えくだされることと信じます。あなたさまに（あなたさまがの意）日ごろ唱道されます人類愛と、侯爵夫人さまとしてこのような不幸な国民におよせくだされる関心とに、あらかじめおすがりするものでございます。彼らの祈願はむなしく終わることなかるべく、彼らの感謝の念は、御夫人さまの美しい思い出を長く残すでありましょう。

ここに心からなる敬意をささげます。

フランスに亡命し、祖国へかえらんとするなれど、その旅費に事欠くスペイン王党派騎兵大尉

ドン・アルヴァレス

署名にはぜんぜん住所をそえていなかった。マリユスは第二の手紙を読めば住所がわかるかもしれないと思った。その手紙の上書きにはこうあった、――「カセット通り九番地、モンヴェルネ伯爵夫人さまへ」

マリユスが読んだのはつぎのような文面であった、

伯爵夫人さま、

わたしは六人の子供をかかいた（かかえたの意）一家の不幸な母親でございます。末の子はまだ八か月にしかなりません。わたしはその子を生みましてから、わずらいつづけております上、五か月前からは夫にすてられ、いまは無一物の身の上で、おそろしい貧亡（貧乏の意）にあいいで（あえいでの意）いるものでございます。

伯爵夫人さまのおなさけをねがいまして、ここに深い敬意をささげます。

バリザールの妻

マリユスは第三の手紙をとりあげた。それも前の二通とおなじく哀願の手紙で、文面はつぎのようであった、

オー・フェール通りのかど、サン・ドゥニ通りの雑貨問屋、選挙人、バブールジョ殿、

小生はさきごろテアトル・フランセにあてて一編の戯曲を送った一文人でありますが、ぜひとも貴殿の理会（理解）あるご配慮とご同状（ご同情）とをたまわりたく、ここに失礼をかえりみず、書面をもってねがいあげます。小生の戯曲は歴史に取材したものでありまして、筋は帝政時代のオーヴェルニュを舞台として展開します。文体は自然であり簡潔であって、多少の価値はあるものと信じます。対句も四か所でうたわれることになっております。喜劇味あり、深刻味あり、奇抜な場面あり、しかも人物の性格は多種多様で、全編にロマンチスムの色調が軽快にみちわたっておりまして、それらが一つにとけあったその筋は、深秘（神秘）な運びを見

せ、観客をあっと言わせるような変展(変転)をかさねたのち、数々の花々しいやま場のなかで大団円となるものであります。

小生が特に心がけましたのは、今世紀の人間がしだいに強めてまいりました欲求、つまりあの「流行」という、いわば風が吹くたびに方向をかえる、気まぎれな(気まぐれな)奇妙な風見を、満足させることであります。

これらの長所をそなえておりますにもかかわらず、人生の戯曲は、特権的な作者たちのねたみとエゴイスムとのために、上演を拒否されるかもしれないと懸念すべき理由があります。なぜなら、新人は失望の苦い跡味(後味)をなめさせられるものだということを、小生もよく知っているからであります。

パブールジョ殿、文人墨脚(墨客)に対する見識すぐれた保護者という、貴殿に与えられた当然の名望を思い、ここに娘を使いとして、この厳冬の季節にパンも火もない小生一家の貧亡(貧乏)を貴殿に申しのべさせることを決意いたしました。小生はこのたびの戯曲を、また今後書くべきすべての戯曲を、貴殿にささげたいとぞんじます。なにとぞこの申し出をおきき入れください。これもひとえに、貴殿の保護のもとに身をよせ、あわせて貴殿の名をもって小生の著作をかざるという名誉を、小生がいかに熱望して病まない(止まない)かを立証いたしたいからであります。もし貴殿がいささかなりともご援助の手をさしのべてくださるならば、小生はただちに一片(一編)の詩をつくって、貴殿への感謝のしるしといたすでありましょう。その詩片(詩編)が、小生の力のおよぶかぎり完全なものとしてできあがりました暁には、戯曲の冒頭に挿入(そうにゅう)して舞台にのせるにさきだって、貴殿のお手もとにお送りいたすつもりであります。

パブールジョ殿ならびに令夫人へ、心からの敬意をささげつつ、

文士、ジャンフロ

二伸、たとえ四十スーなりとも結構にぞんじあげます。

娘をつかわし、小生自身でおうかがいしない失礼の段を、なにとぞおゆるしください。悲しいかな！　あわれにも服装の都合上、外出もかなわぬ身でございますゆえ……

マリュスは最後に第四の手紙をひらいた。あて名にはこう書いてあった、――「サン・ジャーク・デュ・オー・パ教会のなさけ深い旦那さまへ」その手紙はつぎのようにつづられていた、

なさけ深いお方、

もしもあなたさまがわたしの娘とご同道くださるならば、わたしの一家のみじめな(みじめな)状態がおわかりいただけるでありましょう。その節、わたしの身分証明書もお目にかけたいとぞんじます。

このような手紙をお読みくだされば、高潔なお心のあなたさまは、やさしい同状(同情)をおもちくだされることとぞんじます。なぜならば、真の哲学者はつねに強い感動をおぼえるものだからであります。

あわれみ深いお方、わたしの一家はこの上ない悲惨な窮状をしのばなければならぬ身の上でございます。なれども、多少の救済をえるために、当局にこの状態を証明していただくことは、どれほど苦痛なことでありましょうか。それではまるで、他人がわれわれのみじめな(みじめな)貧苦をやわらげてくれるまでは、みだりに飢えに苦しむことや、飢え死にすることができず、じっとがまんしていなくてはならないかのようであります。運命は、あるものに対してはまことにむごく、ほかのものに対してはあまりにも寛大であり、あまりにも片手落ちであります。

あなたさまがおいでくださいますか、または快く御報謝をたまわりますことを、お待ちいたしております。ここに、わたしの心

からの敬意をお受けくださいますように念じつつ、筆を置きます。

真に高潔なお方、

あなたさまのいともいやしく従順なしもべ、

俳優、P・ファバントゥー

この四通の手紙を読んでみても、マリユスはそれほど事情がわかってきたとは言えなかった。第一、どの手紙の署名にも、その住所は示されていなかった。また、それらの手紙は、ドン・アルヴァレス、バリザールの妻、詩人ジャンフロ、俳優ファバントゥーという四人の人物が、べつべつに出したものと思われるのに、奇妙なことには、四通ともおなじ筆跡で書かれていた。同一人が出したものとする以外に、そこから何が考えられよう？

しかも、そんな推測をいっそうたしかにすることがあった。つまり、四通とも粗末な黄ばんだ紙に書かれていて、おなじタバコのにおいがする上に、あきらかに文体をかえようとつとめたらしいが、おなじつづりのあやまりが平気でくりかえされていて、その点では文士ジャンフロもスペインの大尉と同断であった。

このちょっとしたなぞをとこうとするのは、けっきょくむだな努力であった。もしそれがひろったものでさえなければ、ただのわるふざけと見ておけばいいだろう。しかもマリユスは、偶然のたわむれなどをまに受けて、街路の敷き石がいどんできたその賭の相手になるには、あまりにも悲哀に沈んでいるときであった。まるでその四通の手紙に目隠しされて、鬼ごっこでからかわれているような気がした。

それにその手紙は、マリユスが大通りで出あった娘たちのものだという証拠を、何一つそなえてはいなかった。要するに、それがなんの値うちもない紙くずにすぎないことはあきらかだった。マリユスは手紙を封筒のなかにしまうと、そのまま部屋のすみにほうりだし、そして床についた。

あくる朝の七時ごろ、彼が起きあがって朝食をすませ、さて仕事をはじめようとしているとき、だれかがそっとドアをノックした。

彼はもともと無一物の身であったから――ときどき、それもごくまれに、何かいそぎの仕事をする場合をのぞけば――かつて鍵というものをかけたことがなかった。また部屋を留守にするときでも、鍵を錠前にさしこんだままにしていた。――「ものをとられますよ」とブーゴンばあさんがよく言った。――「何をとられるのです？」とマリユスは言うのだった。――けれどある日、ほんとうに古ぐつを一足ぬすまれて、ブーゴンばあさんにそれごらんなさいという顔をされたことがあった。

ふたたび、おなじようにそっとノックする音がきこえた。

――「どうぞ」とマリユスが言った。

ドアがひらいた。

――「なんですか、ブーゴンばあさん？」とマリユスは、机の上の本や原稿から目をはなさずに言った。

ブーゴンばあさんの声とはちがうだれかの声が答えた、

――「ごめんください、あの……」

それはよくききとれない、かすれた、のどをしめつけられたようなしゃがれ声であった。ブランデーやウォッカでのどを焼いてしまった老人の声のようであった。

マリユスははっとしてふりむいた。見ると若い娘がひとり立っていた。

四　貧苦のなかの一輪のばら

ごく若いひとりの娘が、半びらきのドアの内側に立っていた。そとの光のさしこむ屋根うらの天窓が、ちょうどドアのまむかいにあいていて、その娘の顔をあわい光で照らしていた。それはやつれた、ひよわそうな、骨ばった女であった。シュミーズ一枚とスカートのほかは

何もつけていない、はだか同然のからだは、いかにもさむそうにふるえていた。ベルトの代わりにひもを結び、髪もひもでくくり、とがった両肩はシュミーズからとびだし、血の気のない顔は褐色でリンパ体質らしく、鎖骨のあたりは土色に見え、手は赤くかじかみ、口は少しひらいて力なく、歯は何本か欠けていて、目はどんよりとにごり、ふてぶてしく、下品であった。からだつきを見れば発育不全の娘であるが、その目つきはけがれた老婆のようだった。五十歳と十五歳とがまじりあっているのだ。全体が弱々しいと同時に気味わるく、見る人にあわれみの涙をながさせるか、または嫌悪でぞっとさせるような人がときどきいるものだが、まさにそういう感じの娘だった。

マリユスは立ちあがって、夢に出てくる亡霊の姿にも似たその女を、あっけにとられて見まもっていた。

とりわけいたましいのは、その娘が生まれつきみにくいのではなさそうなことだった。ずっと小さいころは、むしろ愛らしかったにちがいない。年ごろの娘らしい風情が、いまなお、不身持ちと貧乏に由来するいまわしい早老とたたかっている。そうした美しさのなごりのようなものが、その十六歳の顔の上にかすかに息づいていて、冬の日のあかつき、すさまじい雲のかげに消えて行く、あのあわい太陽を思わせた。

その顔は、マリユスにとってまったく初対面ではなかった。どこかで見かけた記憶があるように思われた。

——「なんのご用でしょうか？」と彼はたずねた。

若い娘はよっぱらった懲役人のような声で答えた、

——「あなたへの手紙よ、マリユスさん」

彼女はマリユスと名を呼んだ。彼女が彼に用事があってきたということは、これでたしかになった。それにしても、この娘はいったい何者だろう？　どうして彼の名まえを知っているのだろう？

どうぞ、と彼が言うのも待たずに、彼女は部屋にはいってきた。遠慮もなしに、そして、気味がわるいほど落ちつきはらって、部屋じゅうを、片づけていないベッドを、じろじろとながめながら。彼女ははだしである。スカートには大きい穴がいくつもあいていて、長い足とやせたひざとがのぞいている。彼女はさむさにふるえていた。

彼女はなるほど一通の手紙を手にもっていて、それをマリユスにさしだした。

マリユスは手紙をひらきながら、べったりとはられた糊がまだしめっていることに気づいた。手紙はあまり遠くからきたものではないにちがいなかった。彼は読んだ、

親切なおとなりの若い方！

六か月前わたしのために部屋代をおはらいくださったご好意はとくと承知いたしております。若い方、あなたに神の祝福がありますように。長女から申しあげるはずでございますが、わたしども一家四人は、二日前から一かけらのパンもなく、その上家内は病気で寝こんでおります。もしもわたしの思いちがいでなければ、お心ひろいあなたは、娘が申しあげることにご同情（ご同）くだされ、わたしをあわれとおぼしめし、そこばくのなさけをおかけくださるものと、期待いたしてよろしいかとぞんじます。

人類の恩人に対してささぐべき心からの敬意をこめて、

ジョンドレット

二伸——親愛なマリユスさま、娘はあなたのおさしずをお待ち申しあげます。

あやしい出来事がきのうの晩からマリユスの気にかかっていたところへ、この手紙がまいこんだことは、洞窟のなかにふいにろうそくの光がさしてきたようなものだった。急にすべてが照らしだされた。この手紙もあの四通の手紙とおなじところからきたものなのだ。筆跡もおなじ、文体もおなじ、字のつづり方もおなじ、紙もおなじ、タバコのにおいもおなじだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com